

(第3種郵便物認可)

アメリカ自然史博物館。

ニューヨークで最も好きな場所の一つかもしれない。マンハッタンのアッパー・ウエストサイドと呼ばれる地区にある科学博物館だ。設立は1869年。人類学から進化、地球物理学から惑星科学まで幅広い展示物がある。

ニューヨーク滞在中の午後、この自然史博物館を訪れた。今回は、これまでに行けなかったローズ地球宇宙センターと、生物進化および恐竜展示を集中的に見ることにした。幸いなことに、館内のツアーに参加できた。ローズ地球宇宙センターでは宇宙の始まりが紹介され、惑星地球館では地球の始まりが紹介されていた。



やまもと たろう
山本 太郎

マイナス18乗のところで、この大きさの物質を私たちはまだ知らないと書かれて終わる。生物進化の展示では、歴史上5回あったとされる生物の大量絶滅が紹介されていた。こうした展示を見ながら、あるいは解説を聞きながら、今回、初めて感じたことがある。それは、この自然史博物館の展示が、どこか物事の終焉(えん)を意識させるということであった。宇宙には始まり

宇宙の始まり

地球に見立てたプラネタリウム
の周囲には、これまでに人類が知り
得た「大きさ」が10の20乗からマ
イナス18乗まで描かれており、10の

がある。137億年前のことだっ
たという。そしておそらく終わり
も。地球にも始まりがある。46億
年前のことだったという。そして、

やがて終わりが来る。太陽も火星も木星も土星も、銀河系も同じだ。小規模な生物の絶滅は生物が誕生して以降ずっと続いているとも解説は言う。一方で、人類が農耕を開始して以降の過去1万年は、大量絶滅に相当する速度で生物が消滅していると警告する。6回目の大量絶滅だという。それを引き起こしているのが私たちそのものだと。物質が循環する中である物は生まれ、ある物は終焉を迎える。それは大きな天文学的時間、地質学的時間、進化学的時間の中の必然かもしれない。しかしそれを引き起こす権利は私たちにはないと博物館全体は語っているようだった。(長崎大熱帯医学研究所教授)